「ミスをしない人間はいない　～ヒューマン・エラーの研究～」：芳賀　繁著、株式会社飛鳥新社、234頁、ISBN4-87031-484-3（定価1500円＋税）、2001年12月4日発行

〔目　次〕

まえがき
第１章　うっかりミスはなぜ起こる
第２章　錯覚と勘違い
第３章　やめられない、とまらない違反
第４章　しょうゆ差しの色から冷蔵庫の扉まで
第５章　右よし！　左よし！
第６章　ミスとのつきあい方
おわりに

本書の表紙の裏には、「思い込みがミスを生み、防止策が事故を生む、笑って使えるサイコロジー」と銘打っている。

この文面からわかるように、著者はヒューマンエラーについて家庭生活の身近な出来事などを題材に、「スリップの心理学」「ミステイクの心理学」および「違反とリスク行動の心理学」などについて分かりやすく説明している。ヒューマンエラーに関する専門書が多数ある中で、肩のこらない、ウイットのある内容は一読に値する。

最近の失敗について書かれた、いわゆる「失敗本」がちょっとしたブームなっている。しかし、同じ「失敗」にもじつはいろいろな種類がある。なぜ橋が落ちたのか、なぜ飛行機が空中分解したのかなど、技術上の失敗を解明するのは工学部の出番である。なぜ“ユニクロ”は成功し、なぜ“そごう”は失敗したのかについては、経営学の専門家が書いた本を読むべきである。

この本で取りあげる失敗は、もっと身近な、日常的なものを扱っている。電車に傘を忘れたり、ズボンのチャックを閉め忘れたり、間違い電話をかけたり、お茶をこぼしたり、歯医者の予約をすっぽかしたり、駐車違反の切符をきられたり。しかし、こういう身近な失敗も、その要因、発生メカニズムは、鉄道事故や航空機事故などを引き起こす人間のミス（ヒューマンエラー）と何ら変わるところがないと断言している。臨界事故も、医療ミスも、入試の採点ミスも、みんなヒューマンエラーがきっかけで起きている。

本書は、ヒューマンエラーを人間の認知、行動の失敗と捉え、心理学からのアプローチがいちばん有効だと考えている人に役立つ内容が記載されている。笑い話の種になるミスも、大事故の引き金になるミスも、その背景要因が同じであることに気づくだけでも有益ではなかろうか。